「ピサ大聖堂内ティーノ・ディ・カマイーノ作皇帝ハインリッヒ七世の墓、その新再構築案」

團　名保紀

1315 年、ティーノ・ディ・カマイーノがピサ大聖堂中央アプス部に建立した神聖ローマ皇帝ハインリッヒ七世（1313 年 8 月 24 日、聖バルトロメオの日に死去）の墓、1494 年に分解され、その中核的部位のみ同聖堂内に移設された墓に関し、私は 1980 年、ロンドンとピサに現存する螺旋円柱がティーノ作の帝墓を構成していたとした。そして 1983 年、それらが支える三層構造、二重アーチ性による再構築案を図示するに、一階層下方に聖バルトロメオの祭壇（聖三位一体の祭壇）をも再現した。理由は、預言者フィオーレのヨアキムが生前預言で、人類が父と子の段階から第三、即ち聖霊の段階に入る年であるとしていた 1260 年から数え半世紀、1310 年に神聖ローマ皇帝としてローマでの戴冠を目指しイタリア入りしたハインリッヒローマ王に対し、ダンテやイタリアの皇帝派が救世主キリストの再臨、聖霊の段階のもたらしてであるとみなしていたからである。1993 年には海神ネプチューンの象徴たる三叉の矛やパルメッタ、大輪の花を浮彫した大理石板二枚を私は発見し、それらが一階層上部で石棺及び横臥像を迎えた壁龕の樽型天井の一部であると判定、二重アーチを伴う 1983 年の再構築図が正当である旨証すことが出来た。それ以後私は同モニュメントの建築、彫刻、装飾全般の目覚ましい古典古代性、ルネッサンスへの先駆け性について一層強調することとなった。だが今日まで具体的に二石板を取り込む詳細な再構築図を作成しなかったこともあり、昨今欧州でピサの帝墓の新再構築案が次々打ち出されていく中、二枚の大理石板の反映が見られないばかりか、大局的にその欠落によって今後の研究全体のあるべき方向性が見失われているのも事実なのである。従って本論考は、四半世紀以上前私が発見した二石板を合理性をもって取り込む新再構築図を提示し、帝墓の実相、とりわけそれがブルネッレスキをはじめとするルネッサンス芸術の重要な礎をなした点についても明確化しようとするものである。

この度の新再構築図作成には、幾つか新たな観点が導入されている。まず一階層の祭壇、そして樽型天井に守られた墓の中核的部位、それらの彫刻及び建築的部位の組み合わせに於て、さらには皇帝座像と廷臣群像を迎え緩やかなアーチで冠される第二層の形状で、現ウイーン在の所謂「シャルマーニュの帝冠」、下方から二重アーチを訴えた中世最も権威を誇る宝冠が反映したという点がある。また全体に左右対称、三層構造性を示す帝墓の人体的特質づけには、祭壇、石棺、横臥像を強調したモニュメンタルなピサの帝墓への前例、アルノルフォ・ディ・カンビオが 1300 年の大聖年直前ローマの聖ピエトロ教会正面壁裏に設置した法王ボニファーチョ八世の墓、その近くに存在していた八世紀初頭の法王ジョヴァンニ七世の墓の背後の壁面に施されたビザンチン式モザイク、両手を高く上げて祈る「オランスの聖母」の立ち姿が反映し、都市の守りたる新しき教会を象徴するものであったと解釈した。ちなみに同法王墓の入り口は二本の螺旋円柱が支えるアーチを形成し、その奥

には祭壇が設けられ、ピサの帝墓一階層の状況を先取りしていたのでもある。なお帝墓にピサ大聖堂の主体、聖母マリアの巨大な立ち姿、即ち人体的特質付けを認めるのにこれまた貢献していたのは、中央アプス部壁面下、帝墓を挟み、織物をモティーフとして描かれ、1995 年に発見されたフレスコ画である。それは聖母マリアの華麗なマフォーリオン（頭部のヴェール付きのマント）の象徴として解釈できるからである。